

高等学校グランドデザイン会議第2回第2専門委員会概要

日時：平成18年8月30日（水）

13:30～15:30

場所：県立図書館 研修室

<出席者>

高山委員長 佐々木副委員長 伊東委員 工藤委員 佐藤昭雄委員 佐藤和志委員
佐藤勝俊委員 下山委員 新田委員 杉田委員 斗沢委員 野呂委員 馬場委員
福原委員 藤田委員 本谷委員

開会

司会

それでは、定刻になりましたので、ただ今から「高等学校グランドデザイン会議 第2回 第2専門委員会」を開会いたします。

議事録について事務局より御報告させていただきます。

【事務局が、配付資料に基づき説明。】

報告事項

司会

続きまして次第の「2 報告事項」へ移りますが、これより進行は高山委員長にお願いしたいと思います。

高山委員長

第2専門委員会の委員長を拝命いたしました、高山と申します。

前回の会議では、皆さんそれぞれの立場から見た教育の現状についてお話しをいただきました。今回は、この検討課題にあるように「学科・コース等の今後の方向性」について話し合いをしたいと思います。今日の主要な到達目標としては、これまでの成果と課題についての検証だと考えています。これがスタートの一番大事な部分であり、十分に話し合いをしたいと思いますので、皆さんよろしく御協力をお願いします。

時間につきましては大体3時頃を目途とし、活発な意見交換ができれば大変ありがたいと思いますので、よろしくをお願いします。

これから私が議事進行して行く訳ですが、本日の配付資料の中で、皆さんからの意見をまとめた資料3が今日の参考資料になるかと思えます。その前に、我々に与えられた

課題について検討するにあたって、社会の変化の大きな部分について共通認識として持っていなければならないと考えています。様々な形で教育に携わって来た方々、あるいは私も含め民間の方々も出席していますので、それぞれの立場や経験を踏まえて、最近の社会の流れ、あるいは今後どうなるのかについて時間を少し割いて話し合いたいと思います。豊富な情報を仕入れているでしょうし、学校経営の中で社会との関わりもあると思いますので、その辺についてお話ししていただくという形で進めさせていただきます。

社会の認識やこれからどうなるのかについてお話ししてください。

A 委員

皆さん御存知のとおり2007年問題という事で、非常に日本の技術が脅かされているという認識があります。

進路の立場から見ると、今日本の産業が復活しつつあると感じています。やはり日本は、これからも技術立国でやって行くのではないかと強く思います。その時に人を輩出するのは教育の力であり、工業に大きく貢献していると思います。青森県も企業誘致をしています。その中で受け皿となる人材は、やはり県の中で育成して行く必要があるのではないのでしょうか。これからの日本の事を考えると、独自の強い技術を持つ国という方向になって行くのではと期待しています。

B 委員

1番大きな変化はやはり少子化で、全てに影響を与える変化だと思います。もう1つは、高度成長から安定成長へ、あるいは国内市場から国際市場へという動きに伴って産業構造が変わった事により、社会が高校の卒業生に求める内容が変わったという事です。工業高校の場合ですと、以前は必要な技術を身に付けて、それを直接活かす事が求められていましたが、今は工業高校で学んだ内容が、現場ですぐに役に立つ事はほとんどありません。物づくりの精神や、素直な人間性等が求められるようになった事が一番の変化ではないのでしょうか。このような変化があるので、高校では何を求められ何を教えなければいけないかという視点から、学科・コース等の在り方を検討するべきです。

C 委員

今のお話しでは少子化が問題という事でした。もう1つの問題は、小・中学校でゆとり教育を実施した結果、やや安易に流れる面が出てきている事です。先程A委員がおっしゃったように、日本は技術立国ですから技術者をしっかり育てる必要があります。

この会議で高校の話をしていると、大学に進学するための高校と皆さん認識されているようですが、特色のある学校も必要なのではないかと思います。その視点を忘れて、ただ大学に送れば良いとなると、結局は進路指導が先送りになってしまいます。高校の存在理由が何かと言うと、大学受験のための勉強をさせる存在でしかありません。技術者を育てる学校については、いかにして実力を付けさせ自信を持って社会に出すかを目標と

した教育を受けるさせる。そういう学校でなければいけません。学科改編は必要ですが、普通高校だけをどんどん増やして行くという流れはおかしいのではないのでしょうか。

高山委員長

工業高校あるいは高等専門学校から上の学校へ進もうと考えると、工業高校で最低限教えるべき要素はあると思いますがいかがでしょうか。

C 委員

私達の学校では学習・教育目標というものを作っています。何故私達の学校が、青森県では青森市ではなく八戸市にあるのか。その所から存在理由はこうだということを打ち立てて、学校の教育目標としています。学生の時点で勉強し、実力を付けて自信を持って社会へ出て行ける。それを植え付けるのが学習・教育の目標です。それに基づいて、学校のカリキュラムが設定されて、教師が配置されています。

最終的にはB委員がおっしゃってましたが、実力を付ける事です。それがなければ、やはり学校としての存在理由がなくなってしまうのではないのでしょうか。

高山委員長

社会のニーズについて、既に高校教育の中の工業分野は即戦力ではないというお話しをいただきました。

D 委員

商業は、農業や工業のように物を作るという職業ではなく、生産された物を売るのですが、そういう能力も育てなくてははいけません。そう考えると、やはりマーケティング能力を育てて行かなければいけませんので、当然学校でもそういう事は学習させています。ただ、先程からお話しにあるように、昔は専門高校はスペシャリストを育成する事が使命でしたが、産業構造の変化により高校卒業後に即戦力という事は難しくなりました。ですから、最近では専門教科を学んで、更に上級の高等教育を学んでという生徒が増えつつあります。そのための土台になるきっかけを作るのが、専門高校ではないかなと思います。

しかし、専門高校では全ての生徒が進学する訳ではなく、就職する生徒に対し最低限の知識は付けてやらなくてははいけません。普通高校ではキャリア教育にはどちらかと言うとあまり力を入れていませんが、専門高校では、労働の価値・意義、そういった目的意識をしっかりと植え付ける事に力を入れています。

高山委員長

社会の変化は如実に感じられますか。

D 委員

例えば、以前程ではありませんが、生徒は学校で培った会計能力活かす事ができる事務系の仕事を好みます。しかし、そういう職場が青森にはなく、能力を活かす事ができません。そういう問題はあります。

E 委員

商業高校では、かつてはあっという間に金融機関や証券会社に就職が決まっていたのですが、最近はほとんどそういう所に入って行けません。専門教育を受けながら、さっぱり道が開けないのが現状です。

平成元年あたりのバブルがはじける前は、情報処理科からはソフトウェア会社へ入社でき、いくらでも欲しいと言われたものです。その連中がクラス会をやった時には、ほとんどの人が別な仕事をしていました。そういう状況が1つあります。

社会が変化した事が原因で、高校生がそういう所に入って行けないようになったとは思いません。県内で見ると、社会が変わった事によって、高校生が働けないような職場になったかと言うとそうではありません。一番大事なのは、会社の人が言うのですが、高校生とは一緒に仕事はできないという見方です。つまり、だらしが無い、挨拶がができない、一般常識がない、こういう見方が、専門高校に限らず高校生全般に対してなされている。これが専門高校生にとって非常にマイナスに働いているのです。

基本的な教科を学ぶ事によって、勤労観や職業観を植え付ける。そして、高校生はダメだと言う社会の評価を取り返して行かなくてはなりません。そういう意味で、職業高校の役割は大きいと思っています。現実には、商業高校があり、商業科と普通科を併設する高校があり、普通高校の中で商業の科目を設置している学校は沢山あります。全国商業教育研究会に登録してる県内の公立高校は42校もあるのです。それだけの学校が商業教育の一端を学ばせたいと思っているのです。そう考えてみると、いわゆる進学校以外はビジネススクール的な部分を必要としている、という評価があるという事ではないでしょうか。

職業教育の成果は上がっていますので、やはり、高校全般に対する評価をなんとかしなければいけないと思います。

F 委員

農業をされてる方達が非常に高齢化し、農業の担い手が少なくなっているのです。農林水産省では色々な形で農業がしやすいよう配慮しているのですが就農者は少ないです。特に、農業高校は農業の担い手の育成が大きな教育目標でもありますが、現状としては農業高校を終わってすぐに農業自営する事は技術や知識の面から無理があります。本校においても、自営するのであれば、営農大学校や研修施設に行つて更に勉強してから自営しなさいと勧めています。

G 委員

普通高校の進学校においても、やはり子ども達が変わって来たという感じがします。高校に入学する時には「大学へ進学したい。」と言いますが、教師や保護者が思う程、生徒達には大学大学という意識はありません。とりあえず高校へ入学するためにそう返答はしますが、何のために、どんな大学へ行くんだとなった時、子ども達の中には職業観も情報も意欲もない状況です。85%の生徒が大学へ進学する中でも、私は専門学校でいい、就職でいいという子もいます。進学校へ入学していながら、2年の段階で既にそういう状況です。その一方で、保護者の意識はあまり変わってなくて、とにかく上級の学校へと希望しています。

現場にいる教員の立場としては、保護者のニーズにも応えなくてはいいませんが、子ども達はガンバリズムといったものがないので、何のために行くのかという進路指導をきちんとしないとその次へ繋がって行かないという状況があります。それについては、専門高校の委員の方がおっしゃってましたように、キャリア教育とか、挨拶や、協調性や、高校生としての基本的な振る舞いや、そういったものも教える必要があると思います。普通高校の進学校は、保護者のニーズあるいは県の課題を受けて、生徒をできるだけ上級の学校へという動きの中で頑張ってきているのですが、進学のための予備校化してるような一面もなくなはないかなと思います。だからこそ、高校においては、人づくりや心の教育を大事にしないてはいけません。ニュースでは幼児虐待や親殺しの話が見られますが、正にそういった人としての在り方・生き方について考えさせるために、普通高校の中でもキャリア教育を兼ねた職場訪問や地域への清掃奉仕等を通じて、人づくり、挨拶、協調性をもっと大事にして行かなくてはいいけません。つい数や形に目を奪われ、本当に大事な事が目に見えない時もあります。そういう事に時間をかける事が、将来のためになるという気がしています。

H 委員

本校は普通科と商業科の併設校でしたが、最近の求人では高校生に求めているものは、以前商業科があった頃には技術的な事も重要な要素だったかもしれませんが、最近はそのような人柄的な事を高校生の就職者に求めているような気がします。やはり、スペシャリストとしての求人は、上級の学校へ進んだ生徒の中からという感じで募集しています。

実際に就職した生徒を見ても離職率が高く、結局自分がやりたい職業に就いたかと言うとそうではない場合が多いのでしょうか。そういった状況を反映してなのか、進路が3年の間に流動的に変わる傾向がありますので、キャリアカウンセリング等の職業に対する教育が今は大事だと感じています。

I 委員

普通科の視点から見ると、少子化により、生徒1人1人を大切に個別の指導や多

様化した指導が必要だと言われますが、私は1人1人を大切にするためには、全ての生徒が基礎・基本をしっかりと身に付け、学習面・生活面での土台作りができるような指導をしなければいけないと思います。このようなあくせくした時代だからこそ、高校時代はじっくりと将来を見据えた土台作りが大切な時期だと思っています。

具体的には、高校3年間で、しっかりとした基礎学力を身に付けさせる事に加え、人間指導と言うと大げさですが、マナーを守る事や集団の中でどういう生活をしなければいけないかをきちんと教えて行かなくてはいけないと思っています。

本校は、割と進路の進むステップは遅い方です。例えば、普通高校では2年次に文系・理系のクラス分けを行う学校が多いのですが、本校は3年次に初めて文系・理系のクラスを分けるのです。そういう学校でも、「何で私達に文系・理系とか将来の職業や大学を急いで決めさせるんだ。」と聞いてくる生徒がいました。「私は将来がすぐに決められないから、じっくり学びたいから普通科を選んでいる。」という意見があり、非常に忘れられない言葉です。

まとまった話にはなりません、普通科として、教科の基礎・基本をしっかりと生徒に身に付けさせる。また、人間として、社会人として、集団の中の一員としてどうやって生活しなくてはならないのかをまず教える。それから、個別化、多様化という方向に進ませたいと思います。例えば、大学で見ると、専門化という事で1年次から専門の科目を教える大学が多くなりました。東大は教養課程が残っていますが。高校においても、教養課程と言いますが、普通科の中でもみんなが身に付けておかななくてはならない教科の力や人間性・社会性はしっかりと教えて行きたいと思っています。

」委員

私が高校生の時、あるいは教員になった時には、職業学科は専門的な知識や技能を売りにする、普通科は一般教養や総合力を身に付けて勝負する、そんな違いがあったような気がします。最近の社会のニーズの傾向を見ると、普通科、職業学校に関係なく、課題発見能力、課題解決能力、集団の中で自己の役割を自覚し共同で物事を解決して行く、そういう能力が求められていると思います。

また、社会のニーズも分野により濃度があると思います。日本が世界に誇れるような高度な技術の分野では、昔も今も社会のニーズは変わらないと思いますが、これまでは考えられなかったようなその他の分野、ネイルアーティストや犬のトリミングを教える学校といった昔からの伝統的なニーズがある分野ではなく、最近ニーズが深まってきた分野が出てきたからだと思うのです。

高校生の進路志望の多様性という事が言われています。しかし、青森県が特色のある学科を設置し始めた時期には、社会のニーズに応じてと言うよりは、生徒の進路志望の多様性を重視すると既存の普通科や職業学科では対応できないと考えた結果、こういう学科を作って対応してはどうだろう、と言う事で特色ある学科の設置に踏み切ったのではないのでしょうか。もちろん、社会のニーズも伴っていたとは思いますが。しか

し、あまりに生徒の進路志望の多様性ばかりを考えてはられないのではないかと思います。我々高校側が果たすべき教育の役割や責任にも限界がありますので、基礎・基本をまずしっかり勉強させる事が全ての高校に課された課題とされます。

K 委員

私はずっと進学校に勤務しておりましたので、総合学科に来て良かった面をお話したいと思います。前にもお話ししましたが、例えば本校の位置をお話しすると、大学に行きたいのか、就職したいのか、将来が良く分からない、そういう生徒が多く入学して来ます。総合学科には1年次に「産業社会と人間」という科目があり、生徒達はこの科目を通じて、自分の将来像や夢や生き方等について様々考える事ができ、非常に良い科目だと思っています。進学校で取り入れても良いのではないのでしょうか。この科目を通して、自分の生き方や将来や就きたい職業を考えさせ、大学へ進学した方が良いのか、専門学校へ行った方が良いのか、直接就職した方が良いのか、生徒自身に考えさせるのです。普通の受験校であれば、1年次からひたすら勉強しているので大学入試には非常に有利ですが、総合学科では自分で進路を決めるまでだいぶ時間がかかるので、受験勉強のスタートが遅くなり大学入試には不十分な点もあります。

1年次には「産業社会と人間」で自分の将来について考えさせ、2年次には3日間程度ですがインターンシップがあります。私達と各職場とで意見や感想のやり取りをする事で様々な生徒の様子を聞く事ができ、それによって私達が指導する事ができます。また、生徒も現場に入る事で、生徒自身も変わります。いくら口をすっぱくして言っても駄目な点も、やっぱり先生達が言っているように挨拶は大事だとか、それだけの体験をして来る事は良い事だと思います。2～3年時には「あすなる学」と言う総合的な学習の時間を設け、地域社会、大学、役所等様々な分野の人とタイアップしながら、生徒が興味を持った分野について研究させています。去年の生徒を紹介すると、新町活性化事業に参加し、青森公立大学の推薦を受け、青森のために頑張りたいという生徒がいました。そのように物事を考えさせる事ができます。総合学科は凄く忙しいのですが、自分の姿を考えさせるには非常に良い仕組みだと思っています。

高山委員長

前回も、社会に出た高校生と接した方から色々な意見をいただきました。社会が変化している中で、学校側が生徒達を実社会に出す際の期待と、実際に社会へ出てみて感じる実感がそれぞれ違っているような感じがします。その辺の話を少しいただきたいと思っています。

L 委員

普通高校と職業高校の先生からお話を聞きましたが、私の過去の経験からすると、果たしていつの時代であっても根本のものが大きく変わっているかと言いますと、それほ

ど社会は変わっていないだろうと常に思います。言葉では「産業構造の変化」となるのですが、日本では1～3次産業はまだしっかりした形であります。その中に1・5産業が出てきたり、更に1+2+3=6次産業が出てくるだろう、産業の構造はこれから変わって行くだろうという議論が学者の間で出ていますが、私は根本的なものは変わらないだろうと考えます。

私が若い頃は中卒者が金の卵とされ、東京方面に就職して行った連中がいました。私達が高校に入った後にクラス会をやった時に、中卒で就職した連中が帰省し、その際に高校生になった連中が中卒の連中から社会がどうなのかを学んでいたと思います。今の高校生は同輩で社会に出ている人が少ないので、社会に関する情報が集まらないのです。

また、実際の社会の厳しさや、社会が何を求めているか等を一括りにしてもしようがないでしょう。会社によって求めている人格や技能は違うと思います。そういう意味ではそれぞれの専門高校があり、それぞれの考え方で学校教育や生徒指導をされてると思います。

社長さんの話を聞くと、切れない生徒が欲しいと一番最初に言われます。高校や大学を卒業して入社してくる人に、即戦力は求めているというのが多くの社長の考え方です。この人達を10～30年でどこまで教育して行くか、定年までどうやって飯を食わせて行くかというように、大きいスパンで考えていますので、あまり短気にならず長い目で生徒を見て、社会に送り出す時には一生懸命やれと励ます事が必要です。そういう意味では、小学校からほぼ義務教育化されている高等学校までの間に、どういう人格を作っていくのか。教育委員会全体として、高校の教科だけでなく、学校にいる間にどういう生徒を作っていくのか一貫した考えが必要です。高校の教科だけで考えているのでは、社会に求められる人材は出てこないでしょう。小・中・高一貫して、先生、生徒、父兄が一体となって行かなければならないだろうと思います。

過去何十年も文部～文部科学省の指針を見てきた訳ですが、時代によって極端に変えてしまうのが非常に気になる所です。非常にとまどいがあるのが現場の先生でしょう。1つの方針は絶対に曲がないというのが民間の立場では普通の考え方ですから。人材育成は会社に入ってからでもできますので、小学校から高校を卒業するまでの間にどういう人格を作るのかが大きな課題だろうと思います。

M委員

今お話ししていたように、中学校側でも強調していない訳ではないのですが、進学する事を考えると勉強に偏りがちなのが現実です。ただし、変わらない部分もあり、基礎・基本であり、躰であり、挨拶であり、時間を守る事であり、これに対してもっと力を入れた教育を行うべきです。どのように切れない子どもを作る教育をするかは、非常に難しいという気持ちです。

本校は小・中学校の連携指定校になっており、これから内容を検討するのですが、挨拶や心の教育といった事を取り入れて行きたいと考えています。

また、職業教育についてですが、本校では生き方教育として、キャリア教育とまでは行きませんが、できるだけ3年間を通じて高校を調べるとか、職場を訪ねるとか、そういう活動をしようと考えています。県内の各中学校も同じパターンが多いのではないかと思います。

N委員

こういう仕事に就きたいと自覚し始める時期が、かなり遅いという実感を持っています。中学校の段階で、こういう分野へ進みたいという方向性くらいは決まらないといけません。高校へ進学せず就職する生徒は数える程しかなく、ほとんど義務化されてしまった高校へどんなジャンルでもとりあえず入れればよいという形が多くなっています。そのために、こういう仕事に就きたい、こういう方面に進みたいと進路を決める時期が非常に遅いのではないかと感じています。もっと早く意識するべきであり、高校を出たらすぐに仕事に就ける状態でないといけないという気がしています。

私も何人も雇用した経験がありますが、学校によって仕事に使える生徒の多い・少ないの差が凄くあります。将来はこういう方面に行くんだと考えるように、早く向けさせて行く指導をして欲しいです。

佐々木副委員長

N委員がおっしゃったんですけど、私達の時代の小学校から大学への流れとは完全に変わっていると思いました。先程福原委員がおっしゃってましたが、急がせられ、選択を迫られてるという印象があります。例えば、小学校から中学校へ行く時には私学の山田中、聖愛中か、そして来年からは県立の三本木中か、という選択があります。私達の時は小学校、中学校は学区に従い、勉強ができて家に資力があれば高校へ行くというような、せいぜいその程度のもので、私の感覚では非常に緩やかでした。今はもしかしたら幼稚園の時点で選択を迫られる事が始まっている可能性もあります。小学校では中学校をどうするか。また、中学校に入ると前期・後期制という新しい高校入試方法が、これが生徒たちにとって本当に良いのだろうかという議論がある中で始まりました。そして、高校を選ぶ際には、総合学科から何からメニューが物凄く、親も子どももどうしたら良いか分かりません。当然、多くの選択肢を用意するには学校の先生達も大変です。おそらく大学進学率の向上という目標で進めて来ているのですが、もう少しすると大学全入の時代となろうとしている時に、大学の進学率を上げて行こうという事自体がちゃんとした目標なのではないでしょうか。最近では高校からの国公立大学への進学者の多いか少ないかが、学校にとっての目標になっている印象があります。

それにしても、色々なステージで選択を迫られ、急がされているという印象がありましたが、それでいいのでしょうか。スペシャリストを養成するという社会の要請がある一方で、人間教育と言いますか、ジェネラリストとして基礎・基本を大事に育て、それからどういうふうにして進路を決めて行くのかという方向もあるでしょう。その部分に

余裕を持って良いのではないかという意見が、今日は多かった気がします。

高山委員長

色々な御意見をいただきましたが、今の青森県の現状と世の中の流れについてお話しすると、青森県を含めて日本全体が地球規模のグローバル経済の中にあり、物もお金も流れが世界的規模になっています。その中で、競争の社会と言いますか、日本のいわゆる暗黙の了解という部分が少なくなり、計算と交渉のビジネスライクな社会に一部は突入してしまっていると言えます。

もう1つは、高齢社会に入ってますので、青森県も人口が減少する時代を迎えたという事です。この会議の冒頭でもありましたが、中学校からの卒業生が少なくなり地域の高校が維持できなくなるという部分もその中に入る訳です。その中で何が起きるかと言うと、これまでは小・中・高と送り出して来ていた子どもの数が少なくなり、様々な需要が少なくなります。物を食べなくなるという事は食料の問題でもありますし、産業としての1次産業の在り方は現状のままでは先細りでしょう。一方では、青森県を支えてきた建設業は公共工事が半分近くまで落ち込んでという厳しい環境におかれ、農業、福祉といった他の分野へ進出を試み、建設業でありながら色々な事をやっている所が多いです。

6次産業というお話しもありましたが、サービス業の中のネイルアート等のニッチ分野が非常に商売になるなど、これまでの産業のイメージが変化している感じがします。大きな会社に入社して、給料をもらって、年齢で給料と地位が上がって、退職金を貰って、老後は年金生活というイメージが崩れており、流動的に動ける人間を求める感じになっています。皆さんが言われたように、人間として最低限のルールをベースとして、交渉・計算しながら仕事をしていく人間が増えてくるだろうと思います。

青森県としての生き方という点で見ると、将来展望としては、エネルギー分野を八戸あるいは六ヶ所で伸ばそうとする動きがありますし、農業に関しても津軽のりんごや米をベースにバイオをくっつけた形で行うなど、色々な面で県としての地域戦略は出ていますので、そう言う面に即した学校教育も必要ではないかと思っています。

私が高校の時はある程度先が見えており、そんなに選択肢はありませんでした。これからの部分と、それを踏まえてインターンシップ等という形で社会との関わりを深め、考えながら生活して行く事も必要ではと思っています。

皆さんの意見をまとめると、世の中は即戦力を求めているのではなく、ベースになる人格と言いますか、社会人として色々な場面で活躍できるような識見を備える事が大事ではないかというお話いただいたと思います。工業系の先生からは、日本の生きる道は物づくりにあるというイメージのお話をいただきました。最低限、大学生なのに物理もできないという学生を出さないためにも、やはりそういう基礎・基本をしっかりとした教育が必要だというお話をいただきました。商業系の先生からは、かつて情報系のような細分化されたコースを卒業した生徒達は、結局今となっては転職してしま

っており、学んだ事が実社会では旨く活かされなかったという話をいただいたと思います。

基本は1人1人の心の教育だというお話しもありましたが、高校教育の中で何をベースにするかと言うと、より社会に近い立場での色々な就業体験のように、学校、社会、家庭と分かれていた垣根を少し低くしたら良いのではという意見だったと思います。

C 委員

学校で全てを教えるのではなくて、実際の社会を重視し、社会と共に教育しようという意見ですね。学力を付ける事も目標の1つですが、あとは社会性と言いますか、心の教育です。

ただ、お話しを聞いて心配なのは、高校生に対する信頼感がないというお話しです。高校はその所に、もう少し力を入れて行かないといけません。

また、普通高校は先を決められない生徒が多いという、逆説的に言うと1つの特色を持っているが、それぞれの学校において目標と自信を持たせてやれるような学校を作っていく事が望ましいと思います。

高山委員長

一般的な話で申し訳ないが、残念な事に、高校や大学を卒業した後になんかと言うと、無業者、いわゆるフリーターという存在があります。あるいは、失業率の平均は4.4%ですが、若年層だけで見ると10%に近い状態です。あるいは七五三と言われるように、中卒7割・高卒5割・大卒3割の人が、就職して3年以内に最初の職から離れてしまう状態です。期待した部分と与えられた部分の格差はあると思いますが、これはやはり社会の損失ですし、働かない若者が身近にいるというのは寂しい気がします。これも入口と出口が旨く繋がっていないからではないでしょうか。

C 委員

将来を決められないので普通高校から大学へ行き、大学でも決められずに、親の脛をかじりニートになってしまう。もう1つは、高校の時に自分で決めろと迫られやむを得ず決めてしまったが、実際には自分の希望と違い結局は離職してしまう。この2つの面があると思います。ではどうするかと言うと、普段から常に社会と接触する経験をするようにしなくてはいいと思います。

高山委員長

ニートとからめてですが、途中で高校を退学した人がそうなる傾向があるとの報道がされているが、実際にはどうでしょうか。

B 委員

青森県の公立高校では、途中で退学する生徒はそんなにいないので問題にならないと思います。

N委員

1年もたたないうちに辞める人が多く、長く続きません。地域性もあるかとは思いますが、企業にしてみれば高卒だろうが何だろうが即戦力が欲しい訳です。電話番ができ、お客さんと会話できるだけでも良いので、そこで仕事を覚えてもらいたいのです。ところが、1年たってさあ仕事をしてもらおうとなった時にはもう辞めていないというケースが多い。町に若い人がいなくなったと言うのは、仕事を辞めてしまいこの辺にいられなくなったので他の町に行くからではないでしょうか。

仕事を辞めても、フリーターで一生仕事に就かなくても飯が食べられるかなり良い世の中です。それが逆に子ども達に悪影響を与えています。この責任を学校に求めるのはおかしいのです。かなり難しい事ですが、親をなんとかしないといけないと思います。

高山委員長

出口の部分ですが、県内の高卒者に対しどのような産業から求人が来ているかという資料があります。製造業がここ2～3年は少し元気になってきているが、建設業は数年前からどんどん絞り込んでいます。金融保険業は平成18年は上向きです。私が入社した時は200人の採用がありましたが、何年か前には9人くらいまで落ちました。今は50～80人ベースのようですが、ほとんどが県内の大学や短大の卒業生です。東京にも求人はかけますが、青森県出身者でもほとんど戻ってきません。景気により採用が左右され、採用人員が少なかったり、あまり自分の能力に関係の無い所で最適と思った職業に就けない事は、生徒にとっては辛い事です。

電気機械製造が抜きん出て多いが、食料品生産業はどんどん減っています。紙パルプは1社ですし。電子デバイスが一番採用が多いです。

県内に工場がどんどん誘致できれば良いが、大企業の海外展開により雇用が国外に流出してしまいます。特に製造業としては青森県は弱い部分があるので、より努力してもらわないと困ります。

社会の変化と色々なコースの状況という事でお話ししてきましたが、皆さんのお手元に渡っている資料3「検討課題に対する専門委員会委員の意見」を見ながら、少し細分化した話し合いをしたいと思います。時間が迫っていますが、できる所までやりたいと思います。

L委員

大学へ行きたい人は1浪2浪しても大学へ行けばいいし、それは本人の勝手です。ただ、高校を卒業して社会へ出すという時に、この資料に出てくるサービス業、卸小売り、飲食、製造といった業種が何を求めているかなのです。製造業については、落ち着いて

しっかり手仕事ができる人を望んでいます。青森県にはキャノンの大きい会社がありますが、その会社は製品のはじきの世界レベルで見ても非常に少ない地域だから、本社工場を青森に置いているそうです。関東、関西、九州は非常にはじきが多く、落ち着きの問題だろうと言われていています。大会社の製造業もそうですが、やはり経営者に言わせると、しっかり落ち着いて仕事をしてもらえる人材が欲しいというのが1つです。小売り飲食サービスについては、しっかりお客様に対応できるような人材が欲しいのです。就職した段階で指導して行きますので、指導されて素直に「はい」と言えて、言われた事を実行して行ける人材が欲しいだけで、大卒が欲しい訳ではないのです。建設業は現場で働いている人がほとんどですので、危険な現場ではしっかり落ち着いた人材が欲しいのです。

この3つの業種を総括すると、高校生に対し、何を学校と家庭で教育するべきかが見えてくると思います。あまり良い話ばかりではなく、こういう話からこそ、今の高校生にメッセージが送れるのではないかと思います。

B 委員

現在の状況として生徒達の就職先は県外の方が多い、という実態を御理解いただきたいと思います。もう1つは、今おっしゃったような生徒を企業は欲しいという事です。そういう子が青森県には多く、大企業の多くから求人が学校へ来ていますし、青森県の工業高校の学校推薦ならほとんど入っています。ところが、残念ながら県内については求人が少ないのです。親の希望なのか、生徒がそうなのかは分かりませんが、最初は6割5分が県内就職を希望しているが、実際には逆転して3割5分が県内に就職でき6割5分が県外に就職というのが実態です。県外に出ざるを得ないのです。

高山委員長

県内に雇用の場をもっと増やして欲しいと、県も商工会議所へお願いしているのですが。

B 委員

実現し難いでしょうから、それを前提とした教育体系を組むのは無理だし、間違っていると思います。

高山委員長

県民意識調査というNHKの調査物があるのですが、「働く事は辛い事だ」という項目で「そう思う」と答える割合が、全世代で青森県が一番高いのです。この事をどう読むかと言うと、労働時間が長い、賃金が低い、経営が厳しい、など色々な読み方ができると思うのですが、数字としてはそのような結果が出ているのです。

働く喜び、勤労観、夢のようなものを、将来子ども達に持たせられるようにしたい。

これまでの御発言の中にヒントがあると思いますが、学校を卒業し、正規に就業して頑張っていて働き、結婚して子どもを持って家庭を築いて、暮らしていくという県民の生活スタイルを示してもいいと思います。

L 委員

今の若者にとって、それでは人生面白くないんですよ。しょっちゅう若い人と飲みながら話もしますし、この間もファッション甲子園で全国から140人近くの高校生が集まり話もしました。やはり大人が考える世界と、子どもが考える世界は違うのです。大人があまり考え過ぎると子どもがいやだと感じてしまいますので、ある程度は許容を持ちながらシフトして行かないといけないと思います。

ファッション甲子園へは何を見て応募して来たのかを聞いてみると、ほとんどが自分達でインターネットで募集しているのを見付けて応募して参加しているのです。事務局からは全部の高等学校に募集要項を送っているのですが、学校は見せていなくても子ども達が自分達でインターネットで見て応募し、それに先生がよく分からないけどついて来ているのです。

今の子ども達はちゃっかりしてるし、しっかりしていますので、先生方の言うとおりに行くものではないと思います。来た生徒は好きな事をして来ている訳ですから、非常に素晴らしかったです。ファッション甲子園の審査員にぶら下がり、当初1時間の予定の所を2時間も自分の反省点等を聞いていました。先生方は、学校現場ではどうてい考えられないと言っていました。

B 委員

そういう目的意識を持った子も確かにいますけど、そうではない子も多いのです。そこも含めて全体を対象にするのが教育だと思います。

L 委員

そういう事ですと、この会議は問題児対策になってしまうのではないですかね。

高山委員長

社会との繋がりと言うか、学校の先生だけを見て、校舎で必死に勉強してスキルアップしても、プラス就業体験等で味付けをしないと3年間で疲れてしまうと思います。

ここまでは社会の変化と高校教育にボタンの掛け違いがあるという現状についてのお話しでしたが、資料3に視点を移して皆さんからいただいた御意見について話し合いを進めて行きたいと思います。普通科、農業、工業、総合学科、共通というふうに御意見をまとめてもらいましたので、細分化した学科・コースについてどうあるべきかについてお話ししたいと思います。

最初に、普通科について御意見をいただいています。全日制普通高校に学年1学級のみ

存在する理数科、英語科、外国語科等は、将来的に廃止し、それらの特色ある学科は1校に集約し新しい専門高校とする、という意見ですが何かありますか。

G委員

問題提起だと思っていただければと思いますが、進路について中学生の段階で選び切れていません。固定化された学級の中で3年間を過ごす息苦しさもあるのか、軒並み定員割れしています。こういった面を見ると、旨く機能していないという問題ばかりが目につきます。特色あるという意味で、普通科の学校に1学級だけ色々な学科が作られたと思うのですが、それらを1校に集約すれば良いのではないのでしょうか。学習機会の均等と言われるかもしれませんが、現状として表現科は八戸市、美術科は青森市にしかない訳ですから、通う事ができない生徒もいっぱいいるのです。

先程までの現状認識からも言えると思いますが、子ども達を先急ぎさせず、むしろ普通科の中で生きるベースになる人間教育等を大事にしながら、そこで職業教育、職場体験、多様な行事等の経験を通じて力を付けさせてやる。そして、3年間でやはり自分はこちらの方向へ行きたい、という方向付けをして送り出してやるのが良いのではないのでしょうか。

高山委員長

英語科、人文科、理数科等について御意見があるようですが、何か補足はありますか。

I委員

私の場合は検証という事で、実際にその学校に勤務している、もしくは昨年まで勤務していた先生へインタビュー調査をしました。英語科、人文科については1倍をきっていて、必ずしも第1志望ではなく、関心を持って入ってきたのではない生徒がいて苦労している学科もあるようです。

理数科については、一昔前は特色ある学科の代表的存在だったのですが、今は理数科としての特色が出せていないと思います。ただ、個人的には、理科離れが進んでいる中で、志望者が少ないという理由だけで理数科をなくしてしまうのは残念だと思っています。

高山委員長

スポーツ科学科を除いてと言うのはどういう意味でしょうか。

G委員

スポーツ科学科の状況を見ると、県内1校だけではなく地区毎にあるのにも関わらず、志望倍率は1倍を超えて子ども達がきちんと集まっています。出口の面から言っても、他の学科では英語を学んだからその方向に行けるかと言うと行けない状況と比べると、

スポーツ科学科は機能してるのではないかという印象を受けました。

N委員

進学をするためには文系の方がいいのですよね。理系となると決まってしまうでしょう。

G委員

理系の方が進学しやすいです。文系よりも理系の方が大学の間口が広く、レベルも多様なので進学はしやすいです。うちの理数科は中高一貫の関係でまもなく募集停止になるのですが、理数科として存在すると言うよりは、特進科として残っているという感じですか。ですから、理数科でありながら生徒の希望で文系科目にもかなりきめ細かく対応していますし、理数科の中からも文系の学校に進学しています。

A委員

工業離れが如実に起きていると思います。進路関係で大学の説明を聞いても、国公立においても理工学部に対する志望率が非常に減っています。ですから、例えば工業高校を対象に工業入学者枠を設定して、物づくりが好きな生徒を吸い上げるという動きもあります。センター試験を見ても、かつて理工学部の合格点は高かったのですが、明らかに低くなっています。そういう点では危機感があると思います。

B委員

理数離れの問題は、小学校や中学校できちんと教えていない事が一番の問題ではないでしょうか。それに、昔と比べると理科の先生は少なく、物理や化学の先生が地学も教えていたりする状況で、理数の面白さが分かってない、分からせられていない現状が問題であり、ここで議論してもしょうがないでしょう。

高山委員長

私なんかも、金融工学等の訳の分からない数式を見ると、数学にいかに慣れ親しんでいなかったか反省します。

B委員

青森県に限らず全国的な状況ではありますが、高校生にとって魅力のある理数系の学科が作ればいいのですよ。

高山委員長

次に進みます。農業という事ですが何かありますか。

F 委員

青森県は農業を基幹産業としていますし、農業教育は農業関連産業に就く生徒を育てる、また、農作業を通して命を大切に作る生徒、他人を思いやる心を持った生徒を育て、人づくりができるのです。そういう意味で農業高校は大切ですし、できれば基幹産業である農業を担う生徒を減らしたくはないのですが、全体的に生徒が減っている中で農業だけ残す訳にはいきませんので、統廃合等を考えて行かなければならないと思います。特に1～2学級の小さい学校では活力が出ないので統廃合もやむを得ないでしょう。学級数が少なくなるとコースも十分に作れなくなるので、思い切って投資効果等を含めて考えなければいけないと思います。

高山委員長

畑作、果樹栽培、畜産、色々なパターンがありますが、青森県の状況を見ると、昔は米とりんごが主でしたが、野菜や畜産が伸びて大体同じくらいになっており、青森県はバランスがとれていると思います。また、私は農業の将来性が先行き真っ暗という事はないと思います。バイオの分野や農業の株式会社化等、既存の農業のイメージがここ何年かで大きく変わります。農業の経営や将来性は、青森県全体として地域にとって大事な産業ですので、これに係る教育は、今までの部分では少し問題があるかもしれませんが、社会の変化に沿う形であれば高校での農業教育もやはり必要だと思います。

F 委員

日本の食料自給率は約40%で、先進国では一番低い率です。国もできるだけ自給率を高めて行こうという取り組みをしています。

高山委員長

次は工業について、何かありますか。

A 委員

今までの学科はそれなりの機能を果たしてきたと思いますが、今後の学科・コースの方向性を考えた場合、やはり現在の工業高校自体の在り方について考える必要があるのではないのでしょうか。日本、青森の方向性を加味しながら、工業高校は物づくりを基本として進めなくてはいけないでしょう。こういう話をしないうちは、学科・コースとしての方向性が見えてこないのではないのでしょうか。

B 委員

こういう問題意識を持っているという事です。このままでいいとは思っていないです。

高山委員長

他の学科もみんな同じですね。次は総合学科について補足等ありますか。

H委員

そこに書いてあるとおりですが、総合学科は教育課程が柔軟なので、授業の組み方によっては職業学科と変わらないようなカリキュラムも作れますし、逆にまるで普通科のようなカリキュラムも作れます。よって、カリキュラムをいかに研究して行くかが課題になります。当校であればかなりの成果を残したと思います。入学してくる中学生は普通科的なイメージを持っていますし、実際に8割の生徒が普通科目を選択しますので、選択科目の多い普通科というイメージで学校作りをしています。

I委員

クラス数があまり多くない総合学科の話ですが、教員数を確保できなくて多くの選択科目を設定できないと言う辛い面もあります。

K委員

本校はこの春一期生を卒業させたばかりですので検証するには若干時間が早いのですが、東奥日報さんの「チャイムが鳴った」の中で総合学科の模索という記事がありまして、これを読んでくだされば総合学科の悩みが非常に良くまとまっており、私も利用させていただいています。総合学科は本校においては良かったと思っています。今後も、進学もでき就職もできるという事を生徒に提示しながら、夢と希望を持って頑張れと言えるような学校になればと思います。

高山委員長

「チャイムが鳴った」を可能であれば、次回でも皆さんに配って欲しいと思います。

7～8ページは共通という事で御意見いただきました。魅力ある高校には施設・環境の充実と人材の豊かさが不可欠である。しかし、県財政の窮状や少子高齢化の流れの中で、教育予算の拡充は期待できないとあれば、基本はスクラップアンドビルドであり既存の社会資源の活用である、とありますが、これにつきののではないのでしょうか。あまりお話しはしてきませんでしたが、社会資源をいかに有効活用するかという視点は欠かせないでしょうし、新規に事業を展開して大きく花開かせる時期でもないです。そうすると、ここにいる我々の知恵が一つ目玉になると思いますので、そこを再認識して行きたいと思います。

それから、各学科・コース及び系列の検証という事で、総合学科と違い専門学科は著しく変化する社会に対応できる幅広い技術・知識を持ったスペシャリストの育成を目指し、実践的技術を身に付けるための専門分野の深化を目的とし、生徒は演習・実習に意欲的に取り組んでいる。資格取得の面においても難易度の高い資格を取得する成果を上げている、との事ですが、目標があれば色々な面で存在意義というものが出てくると思

います。

職業高校に望まれるのは、将来のスペシャリストとして必要とされる専門性の基礎・基本の教育に重点を置き、ここで学んだ事を基礎に卒業後も職場や大学等の教育機関において継続して教育を受けるなど生涯にわたり専門能力の向上に努める事が重要、という事ですが、そのとおりですし動機付けという事で基礎・基本が一番大事なものは皆さんからお話しをいただきました。

最後にある「青森産業学」が必要だという意見もいただきましたが、補足はありますか。

次は8ページです。

青森県の特徴を出せる学科を作る事ができないか。

これから世界で注目されそうな学科を考えることができないでしょうか。

各学科・コース及び系列の検証という事で、幅広い知識・実践的技術を身に付けさせる事で、即戦力を育成すると同時に、高度な資格取得を目指させるスペシャリストの育成を行ってきた。また、勤労観・職業観の育成についても成果を挙げてきたと考えられる。ただ、進路意識が希薄なまま、学力に応じた学校・学科選択者が多くなっており、生徒・保護者の各科に対する入学前の理解が必ずしも十分でない。多様なニーズに合わせて多くのコースが必要かも知れないが、1学科2コースが良いと思う。

進路志望が多様化しているにしても、高卒後の進路志望達成の前提となるのは学力の定着・充実である。従ってどの学科も、普通科目の必要最小限の履修を確保しつつ独自の特色を打ち出した教育に取り組んでおり、大学等進学率の向上等にも一定の役割を果たしていると考えられる。各学科が社会のニーズに対応したものであるか否かは、一概には断定できない。企業の人事担当者が高卒者に求めるものは、専門的な技術・能力よりも人間性・協調性・問題意識・コミュニケーション能力等に比重がおかれている。

社会のニーズは重視していかなければならないが、教育について高等学校が果たすべき責任・役割にも限界がある。

検証にあたっては、次のことを整理・共通の認識事項としたい。

- ・「社会の変化」の内容及び「多様な進路志望」の実態の把握。
- ・「高卒者に求められる資質の変化」の認識。
- ・「地域の活用可能な資源」の抽出。

対応する学科・コース等の検証にあたっては、上記を基に『選択と集中』を明らかにする事で”特色ある学科・学校”の創造に繋げる。青森県の特徴を出せる学科を作る事ができないか。

これから世界で注目される学科を考える事ができないか。

最後に、我々が検証し整理するにあたって組織として一番重要な部分ですので、B委員から肉声をお願いします。

B 委員

社会の変化とは何なのか。多様な進路志望とはどの程度で、どう対応しているかはそれぞれの学校で違うと思いますので、それを整理する必要があるでしょうということです。また、教育に求められているものは何なのか、という事をきちんと認識した上で進まなければなりません。また、ないものねだりをしてもしようがないので、学校に限らず地域社会にある教育資源を抽出して組み立てて行く必要があります。

それから、各論に入るにあたって選択と集中という発想をする必要があります。教育界に欠けているのは選択ということです。積み上げるばかりで、重くなって動けなくなっていると思いますので、ここで集中するのは何かを議論して、それで特色のある学校を作ろうと考えて行けば良いと思います。この事を皆さんでまず確認した方が、最後まで行きやすいのではないのでしょうか。

高山委員長

今日はこれまでのコースや総合学科について検証する中で、社会の変化に対して現状のシステムがどうなのかをテーマに話し合いをしてきました。個別の話を見ると、今まで成果が出ている部分、出ていない部分があると思いました。今日は皆さんに随分お話をいただいたのですが、やはり専門分野もありますので、私も少し分からない部分もあり突っ込みきれない所もありましたが、最初の目標である検証という意味では、色々多面的な意見をいただいたと思いますので、今後考え方をまとめて行ければいいなと思っています。

それでは事務局お願いします。

事務局

時間が少し過ぎたのですが、皆さんにお配りした資料について少し御説明したいと思います。

【事務局が、配付資料に基づき説明。】

閉会

司会

次回の会議は11月を予定しておりますが、テーマは決まっていますのでそのテーマに沿った御意見をいただければと思います。皆様の御都合もあると思いますので、日程を確認・調整の上、改めて日時会場等の詳細につきまして文書にてお知らせさせていただきます。

以上をもちまして第2回第2専門委員会を閉じさせていただきます。本日はありがとうございました。